



[氏名] 市川 佳世子  
[出身都道府県] 大阪府  
[卒業期] 26期（平成15年度卒）



## 自治医大の義務年限で経験したこと

私は大阪府出身です。大阪府は医学部もたくさんあり、都会で島もないため、いわゆる「へき地」は存在せず、そのためへき地医療を経験したことはない。ただ、大阪府における「へき地医療」とは、医学部がたくさんあるにもかかわらず「誰も行きたがらない診療科」であったり、「人が足りていない施設」を指す。そういった経緯で、私は臨床研修医を終えた後は、定員の半数に医師が減った府立の精神病院を3年、その後医師がいなくなった児童相談所の唯一の児童精神科医として2年、保健所・精神保健福祉センターなど行政の施設で4年を経験した。その間、研修として京都大学で公衆衛生学を学び、博士号をいただいた。結果的に、児童精神科医かつ行政の経験を持つ公衆衛生の研究者としてのキャリアを得ることが出来、ナンバーワンではないが、オンリーワンの経歴をもつことができた。確かに、研修医をしているころは、阪大などの医局から派遣されている医師は、研修医→レジデント→専門医→大学で博士号とわかりやすい明確なキャリアが描かれていて、上級医から教えてもらえるシステムも整っており、うらやましいと感じたことはある。しかし、卒後10年以上たってみて、同じようなキャリアであれば少ないポジ



ションを争うことになり、医局というある意味一生縛られる会社に従属していることになるのも不自由なものだとも思う。

大阪府で義務年限を果たしていたころは、基本的に新しく所属するところに教えてくれる医師の先輩はおらず、一人で経験しながら勉強するしかない不安でたまらない日々だった。精神科に勤めた初日、何も知識のないまま外来診察をし、病棟で急性期の暴れる患者を受け持ち、指導医はおらず、男性看護師は怖く、よく泣いて過ごしていたのを思い出す。ただ、結局は数か月で改善する。業務は慣れるし、スタッフとも関係が良くなってくるし、面白く感じることも増えてくる。児童相談所で勤務した時もだれも児童精神科について教えてくれるわけではなく、むしろ福祉職の人に教えねばならず、虐待を受けた子供たちの話を聞くことで自分も傷つき、精神的に辛かった。この経験は今でも辛く憤りの強いものだが、今はそのような児童相談所の現場を変えたい思い、国で働く行政医師になるきっかけとなった。保健所も全く勝手の違うデスクワーク、保健師は怖く、マイペースで仕事をしない事務職員にも困った。しかし、病院の医師としてのある意味自分の指示で回りが動くという役割を奪われたことで、結果的に人間力を鍛える場となった気がする。

ほかの医学部の人達と違う進路を進むことは不安もあるし、悔しい思いや、孤独も確かにある。しかし、結果的に10年たてばそれが実になった気がする。色々な経験の幅ができ、同質な人たちとばかりでいるとわからない新しい世界が常に取り、仕事が面白く感じる。



義務年限を通じて、医療は病院だけで完結するものではないということを身をもって知ることが出来た。私が後輩のことに言えるのは、義務が終わっても30代中盤から後半であり、それから何十年もかけて仕事をするわけであるから、ほかの医学部の人ではできない様々な経験をし、残りの仕事人生で昇華していけばいいのではないかということです。そこから、ほかの医学部の人達のように専門を極めても遅くないと思います。このような虎の子を崖から落とすような経験も、結果的に単なる専門医ではない、深みのある医師になることができるのではないのでしょうか。